

末の松山と興井（沖ノ井）

昔、東北地方の歴代統治者が政務の拠点としていた多賀城地域には、当時のこの地の重要性が伺える場所が数多くあります。そのうちの二ヶ所である末の松山と興井は、どちらも俳聖・松尾芭蕉（1644-1694）をはじめとする日本の最も偉大な歌人たちの作品によって不朽の場所となりました。

末の松山は、数本の松の木がそびえ立つ丘です。その中には樹齢 400 年を超えるものもあり、木々の根元には墓碑が並んでいます。芭蕉は美しい景観と人の営みの無常を思わせる碑との対比に涙を浮かべたと言われています。芭蕉は紀行集『奥の細道』中でこの光景について詠みました。

近くにある興井は、池の中に大きな岩と小さな松の木々がそびえ立ち、まるで松島湾に浮かぶ小島のように見えます。興井は人の手で作られた観光地の初期の一例であるとされています。この場所は長年にわたってかつて仙台藩（現在の宮城県を含む地域）を治めていた伊達家に保護されていました。四代藩主伊達綱村（1659-1719）は、歌人たちに愛されたこの場所を保護・管理する役目に地域の名主を任命したほどでした。